



呉巡検調査を振り返って その四

濱田, 麻矢

(Citation)

海港都市研究, 18:85-87

(Issue Date)

2023-03-27

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100482808>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482808>



呉巡検調査を振り返って その四

濱田麻矢

一日遅れで呉巡検に向かう新幹線の中で、配布されていた資料から宮地嘉六「煤煙の臭ひ」と菊村到「ああ江田島」（以上『ふるさと文学館』広島篇より）、そして中里恒子「蝶々」を読んだ。それと昔に読んだ『この世界の片隅に』が私の事前予習の全てである（「蝶々」は呉の話ではなさそうだったが）。

都道府県ごとに文学作品をまとめた『ふるさと文学館』（ぎょうせい）は楽しい叢書で、初めての土地に行く前にはできるだけ目を通しておくことにしている。目につくのは、旧制高校を擁する地方都市（鹿児島や熊本、金沢など）はもれなく旧制高校生を好んで小説の題材としており、彼らが繰り広げる人間関係の衝突や校外でのロマンチックラブ、自暴自棄的な行動などが土地の風物描写としっかりと結び付けられていることだ。わたしが専攻している中国現代文学には、元来蛮カラで破滅的な青春のエネルギーをとうとぶ創作はなかったように思う。そうした感傷的な描写が好まれるようになったのは、六高にいた郭沫若や八高に留学していた郁達夫に始まるのではないだろうか。

海軍兵学校を描いた「ああ江田島」からは、旧制高校ものによく描かれている焦燥感をもっと煮詰めてもっと破れかぶれにしたような感触を得た。不幸な家庭から遠く離れ、瀬戸内海に浮かぶ島で激しい訓練を受ける青年たち。上級生からの過酷ないじめがあったかと思うとそれは一転して濃密な友情に転じ、二人の青年がどこか浮世離れた教官の娘にほのかな思慕を抱く……。そして戦局が悪化すると、彼らは思いを口にすることもなく続々と死地に向かっていく。由美子さん（教官の娘）はマドンナ的な存在だが、語りの主体である兵学校生たちのホモソーシャルの関係をより際立たせるという役割を果たしている。

さて、呉を実際に歩いてみると、予想以上に「海軍さんの街」という意識がこのまちを支えていることにちょっとたじろいってしまった。『この街の片隅に』のブームがあったにせよ、旧制高校よりもずっと強い生命力を保っているように見える。

最終日、ひとり遅れて大和ミュージアムにゆき、特別展示の「海軍を描いた作家」を時間をかけてじっくり観た。撮影が不可だったのが残念だったけれども、「極端な平和主義に対するアンチテーゼとしての海軍文学（大意）」というキャプションが気になり、ミュージアムショップで吉田満『戦艦大和ノ最期』（講談社学藝文庫）を買って帰りの新幹線に乗っ

た。撃沈された戦艦大和からわずかに生還したうちの一人である吉田の書いたこの一篇は、次々と死んでゆく兵士が陸地に寄せる感情を「彼ラガ真個ノ結婚生活ハ、新婚ノ二日間ノミ」、「一葉ノ写真ヲ肌身ヨリ離サズ……清楚、ムシロ悲シゲナル美人ナリ」などなど女性に託して語ることが多い。先ほどの小説の由美子さんもそうだが、妻なり恋人なり妹なりが陸地で待っていることが彼らの悲劇を増幅させるわけで、ドラマを盛り上げるための小道具として意識されているわけではないということは承知しつつ、どうしても『戦争は女の顔をしていない』というアレクシエーヴィチの本のタイトルを想起してしまう。

文庫版『戦艦大和ノ最期』には鶴見俊輔と古山高麗雄という「落第軍国青年」が解説と作家案内を書いていて、それが本文以上に興味深かった。

徴兵を拒否しようとしてしきれず、陸軍の一兵卒としてラオスで終戦を迎えた古山は、口語で戦記「兵隊蟻が歩いた」(1977)を執筆、彼が最も尊敬したのは「色が黒く栄養も悪い慰安婦が子供を生んだとき、その子の父であることを自認して、負け戦さのなかを逃げのびながら、その女にできるだけのことをしてつくした将校である」と述べた。この叙述を吉田満は「受太刀のしようもないほど、痛烈な指摘ではないか」と評したのである(以上は鶴見の解説による)。

古山自身は、「作家案内」で「今でも、まず反戦か否かを問う心情が、思考の出発点になっていたりする。そういうものは、物書く人のある部分を閉じ込めて、文学を痩せたものにする」と書く(これも「極端な平和主義に対するアンチテーゼ」ということになるのだろうか)。「吉田さんは立派な方だけでも、今後、私たち下級兵士のところにも降りて来て、物を考えてみる必要があるのではないか」「だから、いろいろと話し合ってみたかった」。

エリート将校と兵役拒否経験者、文語調と口語体、「清楚、ムシロ悲シゲナル美人」と「色が黒く栄養も悪い慰安婦」、「二日間ノミノ新婚生活」と「負け戦さのなかを逃げのびたこと」。戦争の書き方、戦場のロマン化と脱ロマン化、戦士が守ろうとする女性の描き方の違いはどこから来たものだろう。海軍特有の審美感というものがあるのか、あったとしたらどこまで関わりがあるのか、さらに知りたくなって古山高麗雄の著書を注文してみた(←今ココ)。

巡検の報告だというのに買った本の読後感になってしまいました。コロナになってから出張が激減、海港都市研究センターのスタッフで出かけたのは2019年春の厦門以来のことでした。ディシプリンの違う人たちと一つの場所を巡りながらあれこれ雑談と研究交流の中間のような話をし続ける楽しさを取り戻せたことが何より嬉しかったです。かき舟で

女将さんたちのお話をじっくりうかがったのが今回のハイライトでした。お世話になった先生方に心より感謝申し上げます。